

山梨学院幼稚園 最優秀園実践発表会 開催レポート

2019年6月29日（土）、2018年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した学校法人山梨学院 山梨学院幼稚園において、「最優秀園実践発表会」を開催しました。関東甲信越地区を中心に、北は北海道、南は関西各地の幼稚園、保育所、認定こども園、小学校、聾学校などの教育・保育関係者、総勢約450名の参加がありました。

以下に山梨学院幼稚園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：2019年6月29日（土）9：30～16：30
2. 会場：山梨学院幼稚園（公開保育）
山梨学院メモリアルホール（全体会・記念講演）
山梨学院短期大学 サザンタワー（研究協議）
3. 主題：子どもの数だけ「科学する心」の入り口がある
4. プログラム
 - 1) 公開保育 9：30～11：15
 - 2) 開会式・研究発表 11：30～12：30
 - 3) 研究協議 13：30～14：30
 - 4) 記念講演 14：50～16：20
 - 5) 閉会式 16：20～16：30

公開保育

「子どもの数だけ『科学する心』の入り口がある」というテーマのもと公開保育を行った。子どもたちの興味や関心を大切に、子どもたちと保育者とでつくってきた環境の中で、子どもたちは、それぞれ自分の興味のあること、好きなことに夢中になって遊んでいた。

<3歳児>

入園当初から、子どもたちが幼稚園の中に自分の安心できる場所や好きなことを見つけて遊ぶ姿を大切にしてきた。公開保育当日は天候に恵まれ、保育室の近くにある砂場や水道付近が大人気であった。これまでの遊びの中で子どもたちと一緒に作ってきた牛乳パックを長くつなげた水路や、ペットボトル、桶、石鹸、泡だて器など、保育者が前日までの遊びから予想して設定していたものを使い、子どもたちはすぐに遊び始めた。



牛乳パックの水路では、水を流したり、水路から溢れ出る水の様子をじっと眺めたり、溢れ出た水を再び集めたりする姿が見られた。また、水道付近の桶からペットボトルで水を汲んでは何回も砂場に水を運んでいる姿、石鹸と水とでモコモコの泡を気持ちよさそうに山ほど作り続ける姿、泥水の「コーヒー」から始まった色水ジュース屋さんのお客さんにジュースを出し、楽しそうにやり取りする姿も見られた。

<4 歳児>

慣れ親しんできた園庭で元気に遊ぶ中で、子どもたちはアリやダンゴムシ、毛虫、チョウチョなどこの季節ならではの身近な生き物に出会うことも増えてきた。家庭でもいろいろな生き物を見つけ、カタツムリ、オタマジャクシ、メダカ、タニシ、ザリガニ、トカゲ、ケッキリムシなどを園に持ってきて、クラスみんなで飼うことになり、次第に保育室や廊下は、様々な生き物の飼育ケースや図鑑、生き物の標本などでいっぱいになった。子どもたちは、生き物を観察したり、直接触れたり、自分に羽や触覚をつけて生き物になりきったり、本物の生き物と見比べながら自由製作で表現したり、身近な素材で生き物の鳴き声や自然の音を再現したりしていた。当日は、自分たちが飼育してきた生き物を観察したり、熱心に世話をしたり、気づいたことを友達や保育者と伝え合ったりしていた。飼育している生き物について疑問が生まれると、近くに置いてある図鑑や絵本ですぐに調べ出していた。この日にチョウチョが卵を産んだことを嬉しそうにみんなに知らせる子どもの姿もあった。また、ある子どもがチョウチョの羽を触ると、手に綺麗な粉（鱗粉）が付き、その子どもは驚いて友達や保育者に見せていた。鱗粉を保育者と黒い画用紙の上に落とすと、その子どもは「これ、宝物」と喜んでた。



<5 歳児>

多文化教育の一環で留学生や外国籍の先生方と触れ合うことの多い子どもたちは、次第に出会った方々の国で大切にされているものや、さらには様々な国の国旗にも興味をもつようになっていった。あるクラスの子もたちは、特にフィリピンのバンブーダンスに興味をもち、それに使う竹の棒を自分たちで作ろうと頑張ってきた。当日は、それまで改良を重ねて作ってきた棒を使って、バンブーダンスをして遊んでいた。別のクラスでは、南の島をイメージして子どもたちがつくった大きなバナナの木の側で、新聞紙で作った南の島風の衣装を身に付け、保育者が流す曲に合わせて子どもたちが陽気に踊っていた。自分たちの踊りを友達や保育者に見てほしい気持ちから、観客席や観客にお出しするジュースも用意していた。また別のクラスでは、国旗への関心の高まりから、子どもたちが描いたいろいろな国旗を懐中電灯を使って光で映し出す「国旗映画館」での遊びが盛り上がっていた。どうしたらもっとはっきりきれいに映し出せるか、仲間と試行錯誤している姿も見られた。



研究発表

本園は2012年度から7年にわたり、「科学する心」をテーマとした実践論文作成に取り組んできた。この日の研究発表では主に、2018年度の実践論文「お米づくりから広がる子どもたちの世界」について報告した。

2017年の春、ある子どもがたまたま「お米のあかちゃん」（お米の苗）を園に持ってきて見せてくれたことがきっかけで、5歳児クラスみんなでのお米づくりへの挑戦が始まった。ちょうど同じ時期、別の目的で行った山梨県立考古博物館で偶然にも古代米に出合ったことで、子どもたちはコシヒカリと古代米という二つのお米を育てていくこととなった。



お米づくりといえば、昔から継承されてきた、土づくり→田植え→水やり→稲刈り→モミの乾燥→脱穀→もみすり→精米といった決まった過程をたどるものである。そのため、子どもの興味や関心、アイデアから、手探りで進められていく遊びとは異なり、保育者の主導が強い窮屈さや葛藤を初めは感じていた。しかし、実際には私たちが想像していた以上に子どもたち主導の様々な活動が多方面に発展していった。古代米との出会いから古代への興味や関心が深まり、子どもたちは藁を使った竪穴住居作りを始め、古代にまつわる遊びを様々に生み出していった。また、石包丁や瓶つき精米器など、今までに見たこともない物や道具との出会いもあった。大発見をしたのではないかと調べた虫がボウフラであったなど、生き物との愉快的出会いもあった。そして何より、人との出会いに恵まれた。考古博物館の方々をはじめ、たくさんの方々に支えられて活動が豊かに広がっていった。

観察画を描くことが得意な子ども、虫が好きな子ども、かかし作りに夢中になっていた子ども、古代のことを本や図鑑で調べては、それからいろいろな遊びを創り出していった子どももいた。自分の得意なこと、好きなことを入り口にして子どもたちが米栽培に関わっていった。その入り口は、子どもの興味の数だけあり、それらを活かしてきたからこそ、一人一人の子どもたちの心に残るお米づくりになったのではないと思う。振り返ってみれば、本園が大切にしている「科学する心」は、それぞれの子どもの個性に応じて、至るところに存在していた。これからも本園では、子どもたちの「科学する心」の入り口を大切に受け止め、子どもたち自身の探究を応援していきたいと思っている。

研究協議

協議のテーマ

- ① それぞれの子どもの「科学する心」の入り口を見逃さず受け止めるには
- ② 入り口を受け止めたあと、どう遊びを深め広げて、「科学する心」を育てていくか

1グループ5～7名、30グループ（3会場）に分かれて、2つのテーマのもと協議が行われた。まず初めに、各自公開保育を振り返りながら①②について考え、その後、自己紹介も交えながらグループごとに①②について話し合われた。最後に、各会場で代表の2グループから話し合いの内容が発表された。以下は、グループの発表やグループ内の話し合いの記録をもとにまとめたものである。



- ① それぞれの子どもの「科学する心」の入り口を見逃さず受け止めるには
 - ・ 担当するクラスの子どもだけでなく、園全体の子どもに目を向け、たくさんの子どもの気づきに触れる。
 - ・ 保育者間で情報を共有し、子どものエピソードを園全体で把握する。
 - ・ 保育者が保育のねらいをもちながらも、子どもの興味や関心に寄り添い、保育を計画する。
 - ・ 子どもへの気づき、発見、興味や関心に寄り添い、受け止め、共感する。
- ② 入り口を受け止めた後、どう遊びを深め広げて、「科学する心」を育てていくか
 - ・ 子どもとの対話を大切に、保育者も一緒に楽しみ、探究する。
 - ・ 子どもへの興味、発見、つぶやき、驚きを他子どもにも伝え、遊びを広げていく。
 - ・ 探究の際の失敗、それ自体も楽しみ、発見と捉える。
 - ・ 「なぜ？」「どうすればいい？」という子どもの疑問にすぐに答えを言わない。「どうする？」保育者が尋ねたり、子ども自身で調べられる環境を設定したり、一緒に調べたりしていく。

- ・ 子どもの気づきや発見を共有する中で、「次はこうしてみよう！」「もっとこうしてみたい！」という意欲につながるような振り返りを工夫する。
- ・ 子どもに気づきを大切にするばかりでなく、保育者が注目してほしいと願うことや予想される体験を踏まえて、子どもたちが興味をもつような環境構成をする。また、子どもの使いたいものが子どもの手が届く所にあるような環境設定を心がける。
- ・ 結果ではなく、過程を楽しむ。

記念講演

河邊貴子氏／聖心女子大学 教授

『深い学び』を支える保育者を演題に、聖心女子大学河邊貴子氏による記念講演がありました。子どもたち一人一人の思いや体験を重要視して、子どもたちが主体的な生活ベースで目的に向かう「形成型プロジェクト」、子どもたちが自ら課題や問題探究する「問題探索」学習など、本園の保育における子どもたちの体験と保育の特徴をあげられました。特に、「子どもたちに育みたい思考力」について丁寧に論じる中では、「最優秀園」に選出された論文の事例を関連付けて述べられ、参加者のテーマへの理解が深まりました。さらに、「深い学び」については、ICEモデル「Ideas 基本的な知識・概念」「Connections 基本的な知識・概念間の関係・つながり」「Extensions 知識・概念の専有化・応用・価値や影響についての考察」を取り上げて、本園の実践にみられる深い学びや学びのプロセスについて述べられました。深い学びを支える保育者の役割について、本園の保育者は、子どもを理解した上で、子どもと同じ目線・同じ立場で一緒に活動する「探究の共同体」であり、子どもを取り巻く大人との出会いをデザインし、子どもたちの深い学びにつながっていることが大きな特徴であると強調されました。



※他園に学ぶ保育者研修…

「科学する心」をテーマに取り組まれている幼稚園・保育所・認定こども園に所属する保育者の方々が、他園の保育から学び、主題の理解を深め、自園の保育の質の向上に繋げていく研修の機会を支援するため、ソニー教育財団が実施している助成制度。詳しくは[ソニー教育財団のホームページをご覧ください。](http://www.sony-ef.or.jp/)

※」への参加者による報告書より抜粋をご紹介します。

- 記念講演では「深い学び」を支える保育者についてお話し頂いた。中でも印象的だったことが「体験がどのような意味を子どもにもたらしているかを読み取り、すくい取り、投げ返す。その際、子ども自身の達成感を重視し、足場をどうかけるかを考える」という理解から援助へのつなげ方である。「足場」というものは見守る・励ますなどという援助を意味しており、足場をかけ、それが成功かはその次の子どもの行動でわかるというものであった。日々の保育の中で、援助について悩むことの多い自分にとって、振り返りや反省、次の保育へ活かすことができる考え方だと感じた。これからの保育で、自分が足場をかけ、その次に子どもがどう考え、動くかを今一度丁寧に見て寄り添いながら保育にあたっていきたい。
- 子どもたちに育みたい思考力について、「何を知っているか」ではなく、「知っていることを活用してどう問題を解決できるか」に着目するお話を伺い、だからこそ幼児期に体験から知る学びが大切なのだ改めて思った。また、ご講演から学んだICEモデルも一つの指標とし、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」のプロセスを踏まえた評価が自園でもできるよう、子どもたちの遊びを保育者間

次に「他園に学ぶ保育者研修



で探究したい。子どもたちの遊びの中での体験が、どのような意味をもたらすのかを読み取り、すくい取り、投げ返し、子ども自身の達成感を重視し「足場をどうかけるかを考え、生活が単発的に分断的にならないようにプロセスを大切にする保育の必要性を学んだ。この保育を実現していくために、園内の保育者一人ひとりが子どもの遊びを探究しながら、保育者同士で共有していきたい。それが「科学する心」を育む保育につながっていくのだと考え、今後に生かしていきたい。

- 講演を聞き、遊ぶ子どもの姿をどう理解して、援助していくかということを見逃さず丁寧に行っていくことの大切さを改めて学んだ。子どもが周囲のどのようなモノやコト、人と関わって遊んでいるのか、そこで何を経験しているのか何が育っているのかを読み取り、すくい取り、投げ返す。受け止めるだけでなく投げ返すことをよく考えていく必要がある。投げ返し方も直接的なこと、間接的なこと、見守り、励ましなど含め次に必要な体験へとつなげていくようよく考えていくことが必要である。さらに個の発見を読み取り、すくいあげ、他の子どもに投げかける、他の子どもとの協同的 pursuit がどう一人一人の追求に生きるのか学び合う関係を支える部分となっていく。そこで保育者がどのような支えとなっていくのかも重要なことである。